
神の願い

りょう

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神の願い

【Nコード】

N68580

【作者名】

りょう

【あらすじ】

神に頼まれ異世界に来る事になった 神田 リサ（21歳）
何か偉い事になった・・・殿下にはストーキングされるし、プロポーズ

されるし・・・赤ちゃんから過ごさないといけないし（泣）

私は、ただ農業がしたいだけなのに~~~~~！！

地味！ 平凡！ バンザーーーーーーイ！！

平凡とは、程遠い少女のお話です。

1話 神の悩み

全ての世界の創造主である 神 ネオ

彼が作った世界 ミレー

そこは、神がはじめて作った世界

今その世界が 滅ぼうとしていた。

理由は、マナの不足 マナは世界の全て

マナが無い世界は全てが滅ぶ

食物は無くなり 草木は枯れ 酸素は無くなり

死の世界になる

何度と無く ネオは 王家に加護を与え 護って来たが

それでも 時間稼ぎにしかならなかった

そこでネオは 考えた。

第三惑星 地球 魔法が無い為 魔力が高く

マナの宝庫

地球に住む人の中には 魔力が無限にあり 自然と魔力をマナに変えられるものが居た

そう 神田 リサ

彼女は、魔力をマナに変えられる人であった。

そして、彼女の魂は……であった

2話

私は、神田 リサ 21歳 農大に通う普通の学生

16歳のとき飛行機事故で 両親が 他界

両親には肉親が無く 私は親の残した多額の保険金と家として貯金を切りつめながら

1人で生活してきた。

リサ「今日は、何の苗するかな~~~~」

家の庭に作った 家庭菜園 私の楽園

リサ「う~~~~ん・・・よし!! ジャガイモとイチゴと
トマト」

なぜ? この三つかって? もちろん! セール商品だったからに

決まってるでしょう（ニヤリ）

「種3つで200円になりますね」

「ありがとうございます。」

―――帰り道―――

うちまでの帰り道

リサ「今日は、家に帰って何するかな〜」。」「

っと考えていると目の前から暴走した車・・・

リサ「まじで？・・・」

ココは狭い路地 車 1台しか通れないような狭さ。

車に当たると思った瞬間

意識が無くなった

3話 神との出会い

あれ~~~~~？

ココ何処だ？

確か、大学の帰りに ホームセンターによつて・・・

あ！・・・ 車に 轢かれたんですね。

しかしココは真つ白で何も無いな~~~~。

??「その者 神田 リサで間違いないか？」

確かに私は 神田 リサだけださ。

??「そうか、おぬしが 神田 リサか。」

なっ！ 何と！！ 声出していないのに分かつとはビックリ。

神「神だからなそれぐらいはたやすい事だ。」

神？　　ってことは　やはり私は車に轢かれて死んだのか。

神「死んでは　おらんぞ。轢かれる直前に　私が　ここに連れて来たからな。」

そうなのか。　それは有難う御座いました。

神「いいえ。　ところであなたに頼みたい事があるんだけど。」

頼みたい事ですか？

神「そう。　私が作った世界に行ってほしいの・・・」

他の世界ですか？何故？

神「私が作った世界 ミレーが今滅ぼうとしているの。 もちろん私も色々やって来たのよ

王家の者達に加護を与えてそれを押さえたり。 でも、ただの時間稼ぎにしかならなかった

の。
」

何で滅ぶんですか？

神「滅ぶ理由は マナ の不足よ。」

マナですか？

神「マナとは惑星の源 マナが無くなれば 草木は枯れ 生き物は餓死し 酸素の無い

死の惑星になってしまうのだ。」

草木が枯れるとは！！ 一大事！

でも私には 何の力も無いですが・・・

神「それは大丈夫じゃ！ お主が居った世界は、魔法が無いのに魔力が強い者が多いのだ

その中でも お主は特別でな、魔力が無限であり、なおかつ自然に魔力からマナに変えておる

。不思議ではなかったか？ お主が植えて植物は、他のものが植えてのよりも大きく育ち

早く育ったであろう。」

確かに・・・

この前、季節外れの力ボチャが生った事が遭った。

神「そうであろう。 お主には、あちらの世界に生まれ変わって貰いたいのじゃ。」

まあ・・・地球に帰っても1人だし 悲しむ人も居ないし。

良いですよ(ニッコリ)

神「そうか！ 引き受けてくれるか。」

ハイ。

神「では、送るぞ！」

ふえ？

パカンン！

足元に穴が現れ
落ちた

いやあああああああああああ！

神「色々能力を付けておいたからな〜」

能力??落としてからいわないでよ〜〜〜!!

こうして リサは転生トリップさせられるのであった。

神「すまぬ・・・いつも お前に迷惑ばかりかけてしまつ。」

4話 生まれてみました。

あの神め!!

いきなり、落とす事無いだろう。

ブツブツ・・・

1時間後

ところでココ何処だ？

真っ暗で何も見えない。

それどころか、水の中に・・・まっ！ まさか!!

赤ちゃんからやり直しですか！ しかも、羊水の中とか・・・ありえない（泣）

しかし、お腹の中は狭いわね。

ん？ 何か羊水の量が減ってるような・・・気のせい？

5分後

気のせいじゃない~~~~~!!

せま~~~~い！

もう、我慢の限界！ さっさと生まれてやろっじゃないの。

10分後

おんぎゃ　おんぎゃ　おんぎゃ　（）　やっ　と　出　て　こ　れ　た　~~~~~

生まれてみたのは良いけど。

赤ちゃんってこんなに初めは見えないのね。

??「やっ　と　生　ま　れ　た　か　」。　パ　パ　だ　ぞ　」

??「あなた、似そっくりですね。」

パパ「いや。　お前に似ていて美人だ。」

ママ「あなたに似たのよ。」

どうやらラブラブな親らしい

??「父上でも母上でもなく 俺に似たのです。」

ママ「あらゝ。 ユイきたのですか。」

パパ「いくら息子だからといって その発言は間違っている!」

ユイ「いえ!! 俺に似たのです! 見てください。こんなに可愛く 賢そうで 魔力も多い!

さすが俺の妹です! 命にかけても絶対に護ります!」

パパ「よく言った! この子は私たちの宝だ こんなに可愛いんだ 変なやからが近づいてくる

みんな排除するぞ!」

ユイ「そうですとも。 父上!」

もしかして、父と兄は・・・・いえ何も言いません。

考えるだけで恐ろしいです。

はあ
　　〃
　　3

5話

転生して5年が経ちました。

5年間思い出したくもありません・・・

何故って？

当たり前じゃないですか！！

授乳とか オムツとか 拷問でした（泣）

でもここ三年で解ったことがあります。

どうやら家は、王族みたいです。

父 ヨシュアン・フレサンス 王族

曾祖父が王だったらしい。

母 リリア・フレサンス

おっとり かなりの美女

兄 ユイリス。フレサンス

7歳上のシスコン兄

そして私

神田 リサ 改め リサ・フレサンス

5歳

白銀髪 の お目目パツチリ 美女

・・・あの神 今度あつたら 絞める 殺す

私は、普通 平凡 がいいんですよ（泣）

まあ・・・字が読めるのと、異常な記憶力ですかね

2歳から兄の教科書を読み漁り 父の書斎の書物を読み漁り

3歳今では 兄や父に頼み王宮図書室などから借りてきつてもらってます。

父「リサちゃ~~~~ん。」

「何ですか？お父様」

父「今から、魔力測定と特性を調べるから」

魔力測定ですって、そんな話聞いてません。

「お父様・・・そんな話聞いてませんが。」

父「あれ？ 言ってなかったか？」

「い・っ・て・ま・せ・ん！！」（怒）

父「（焦）すまん！」

「とりあえずいきます」

父「そうか、行ってくれるか　そしたら、準備して玄関に来てくれ。」

こうして、魔力測定に行くことになった。

6話 父視点

今日は 大事な子が生まれるとの連絡が来た。

父「子が生まれるので 今から家に帰るからな。」

弟子「なっ！ 駄目に決まってるじゃないですか！

あなたは、ここの責任者ですよ！」

そうなのだ。

俺はここの責任者 王宮騎士団団長 本当はなりたくなかったけど・・・

父「えーーーーーーーー！俺いなくても大丈夫でしょう。」

弟子「あなた、自分の立場わかってますか？」

父「わかってるつもりだけど」

弟子「わかってません。」

わかってるけどな。

本来 王族は役職には付かず 領地の管理などをしていればいい
しかし、俺は魔力は強く 剣の腕も強かったため、このような
めんどくさいことをしているのだ・・・

父「そろそろ行くからな。」

弟子「まっ！ まって」

転移魔法

＝
＝
＝
＝
＝
シ
ユ
ン
＝
＝
＝
＝

<自宅。
>

マリア「あなた・・・」

父「大丈夫か？ 何かしてほしいことはないか？」

母「大丈夫です。 もう生まれそうなので 外で待っていてくださ
い。」

〓 〓 〓 〓 〓 1時間後 〓 〓 〓 〓

元気な女の子が生まれた。

父「なっ！　なんと可愛い！」

母「そうですね。あなたに似たのね」

イヤイヤ。お前だろ。

父「マリアに似たんだよ」

カッチャ

ユイ「何と可愛い。さすが僕の妹です。」

しかし、こんな可愛いと・・・知らない虫がたかってきますね。

「

父「そうだな。」

ユイ「何が何でも、僕が守ります。近づく虫（野郎）は、排除します。」

いいぞ！息子よ。

父「そうだな！2人で排除するぞ！」

こうして息子と一致団結するのであった。

7話 母視点

娘が生まれた。

あまり泣かなく、手がからない子・・・

リサは、生まれてすぐから私達の話していることが理解できている
みたいで、

とても頭が良いみたい。

母親としては、少し寂しいですわ。

・・・んにしても、うちの息子と旦那の会話が怪しいですわ。

父「ユイ・・・わかつているな。」

ユイ「解っております。」

父「こんなに可愛い子なんだ、鬼畜で野蛮な男達から守らなくてはならない。」

手段は選んでられない！」

ユイ「そうです！ リサに近づく、すべての男を排除しなくては・・
」

いやいや、貴方達も男でしょう。

父「お前には、今までの倍の量の武術などを遣ってもらつ。いい
な！！」

ユイ「解っております。父上！」

この子の^し今後が不憫でなりません．．．

どうしたら良いのか．．．

8話 兄視点

妹が生まれた。

生まれる前までは、そんなに妹に興味がなかった。

生まれて初めての体面の時、こんなにも可愛く美しい者がいるのか
と思った。

正しく 天使 いや 女神 と言っていいほどの美貌だった

父と僕とで守らなくては・・・

これから忙しくなる。

力を付け、これからの為に備えなくては・・・

「まずは、警備について父上と話し合わなくては・・・」

そつ思い自室を出て 父の書斎に向かった。

コンコン

父「はい。」

ユイ「父上、入ります」

父「どうした？ 何かあったか。」

ユイ「家の警備を強化について・・・やはり、父上も考えておいでだったんですね。」

父の持っている物（屋敷の図面）を見れば、同じことを考えていたのだろう。

父「そりゃな、あそこまでの美貌だからな。」

やはり、僕の父だ！考えることが同じだ。

それから2時間父と今後について話したのであった

9 話

馬車に乗って向う事になった・・・

向う？どこに？？？？

「お父様・・・」

父「なんだい？」

「どこに行くか 聞いてないんですが。」

父「え？ 言わなかったか？」

言っていないから聞いてるんだろ！

父「リサ。そんなに、怖い顔しないで・・・」

「私、畑で野菜達とすごす予定だったのですよ!」

父「リサの畑好きなのは知っているよ。ほんとにごめん。」

「もう良いですけど、どこに向っているのですか?」

父「王都にある。城に行く。」

「・・・城?」

父「そうだよ。本当なら協会で調べるんだけど・・・リサは一樣王族だし。」

それに可愛いから変なのに目を付けないようにね」

・・・父と兄の激愛ぶりは知っているけど、いい加減にしてほしい。

生まれてから 一度も 家から出してもらえてない。

父「それと、王様に会ってもらってから。」

また・・・なんで。

「はあ」 3 またなんでですか？」

父「王・・・まあ従兄弟何だけど、リサに合わせるとうるさいんだよ。」

どこで聞いたのか、リサが可愛くて美しくて賢くて完璧なのを耳にしたらしくて・・・

本当は連れて行きたくないんだけど、魔力測定をしないといけないのを餌にされて

仕方がないんだよ。」

「解りました。」

父「ごめんな。」

「いいえ。お父様も頑張っていたみたいなので・・・」

父「リサ・・・」

こうして、王に合うイベントまで発生したのであった。

10話

大変な事になった。

何が大変かって？

王都について、魔力測定することになった、良いが・・・

馬車を降り城の中を歩いていると、出会う人すべてが 固まる ほぼを染める 「・・・天使」 など

と言いつめてくるのだ。

確かに、白銀の髪 肌も白くなったが・・・顔のパーツは元の自分なはずで、平凡なはず・・・

（（本人は平凡と思っているが、昔からファンクラブがあったがみ

んな恐れ多いと近づいて

こないのだ（

・っん？　なんか聞こえたような・・・気のせいかな。

父「やはり、家から出さなかった・・・」

「お父様？」

父「何でもないよ。早く行こうか。」

「はい。」

11話 番外編 1 ある日の一日 (今後の展開と関つて来ます) (前書き)

11話 番外編 1 ある日の一日（今後の展開と関って来ます）

この世界に転生して3年経った。

そして知った・・・甘いものが少ない。

例えば、ドライフルーツなどはあるが ケーキやクッキーがこの世界にはない。

砂糖はあるが、蜂蜜がない。

この世界に来て初めて後悔をした。

パンには、ドライフルーツを混ぜて焼いたものや、バターを塗って食べるしか方法がないのだ。

「自分で、作るしかないのか（泣）」

私は昔から、料理と畑のことが大好きで仕方がない。

「まずは、材料から集めるしかないか・・・」

牛乳やバターはあるベーキングパウダーもある。

蜂蜜を採る事から初めてつつ、カカオを見つけないとな。

チョコは秘中需品だからな、ココアパウダーもないと、チラミスも作れないし。

蜂蜜のための巣箱を作らないとな・・・

こうして、巣箱作りがはじまったのだった。

番外2（前書き）

東北地震で親戚が被災して、安否確認などでばたばたしていて、投稿が遅れました。

すいません。

番外2

取り合えず巣箱を森に設置して見た。

取り合えずこのまま待つしかないか・・・

蜂蜜が取れるようになるまで、イチゴ 生クリーム バニラエッセ
ンスをさがさない・・・

「イチゴか・・・」

「そういえば、死ぬ前に種を買ってたっけ・・・」

??? そういえば、生まれるときに何か持って生まれてきたと、
お母様が言ってたけど。

聞いてみるか。

―――母の部屋―――

「お母様、私が生まれたとき持っていたものを、見せてくれませんか？」

母「どうしたのですか？急に・・・」

「いえ。気になったものですから。」

母「少し待っていてください。」

。。。5分後。。。。

母「これですよ」

「！！！」

そこにあっただのは、自分が買い集めていた種たちであった。

母「何なのか、よくわからなかったのですが。あなたが生まれたとき、小さな布袋を」

もって生まれてきたのです。きっと神様があなたの為に持たせてのだろうと思い

とっっていたのです。」

「お母様〜〜！ ありがとう。これ使ってもいいですか？」

母「あなたのですから良いですよ。」

こうして種の入手に成功したのだった。

番外3 展開速いかしら???

あれから3ヶ月経ちました。

イチゴ メロン カカオ 蜂蜜の採取

に成功した。

なぜこんなに早く進んだかって？

あれは、種を植えた次の日のことだった

昨日植えた種に水をあげに、庭に出てみると そこには・

綺麗な女の人立っていた。

「あの〜〜、ココうちの庭なんですけど・・・」

「???」あつ！ あなた様が」

「あの〜〜???」

「???」私、精霊王に使えております。ユリアと申します。」

「ユリアさんですね。よろしくお願いします。」ペコリ

ユリア「私し何かに頭を下げないでください!」

「でも、・・・」

ユリア「お願いします。王に怒られてしまいます(泣)」!

「わかりました。．．．でもユリアさんは、何をしていたんですか？」

ユリア「そうでしたわ！ 私し、精霊王様よりあなた様のお役にたつように言われて来ました。」

あれ？ 私 精霊王なんて知り合いじゃないけどな．．．???

「私知り合いじゃないけど？」

ユリア「間接的には、知り合いじゃありません。あなた様の生まれて時より 王は、見守って

おられました。本来なら、王が来て契約をするはずだったにですが。まだ、その時では

ないので、私が来ました。」

「そうなのですか．．．」

ユリア「ところで、この庭は？」

「私が育てている、作物だよ。」ニッコリ

ユリア「（やばいですわ！可愛すぎ！……）そうですか、では……」

すべてのマナよ。 生命の息吹を……

ユリアがそう言うと、作物が　グイグイ　成長していき　アッと云う間に食べれるまでに

成長した。

「……す……い……ありがとう……」

ユリア「（こんな喜んでくれるなんて）いいのですわ！これから
よろしく願います。」

「いちばん、ニッ」

こうして、アツという間に材料採取が進むのだった。

14話 測定がなかなか進みません。

やっと王の間までこれた。

何が遭ったかつて？

聞いてください。

泣きなくなりました。

〓〓〓〓〓 30分前のこと〓〓〓〓〓

「お父様……。城に勤めている人たちはお暇なのですか？」

父「暇ではないはずなんだけど……。」

「では、なぜ皆様行く所いく所に、居るのでしょうか。」

父「リサ……。本気で分からないのかい？」

「??.?。」

本気でわからないとは、どういことでしょう？

父を見に来たと言っ事ですか？

きつとそつですね。」

父「リサ、そうじゃないよ。」

「声に出てましたか？」

父「全てでていたよ。」

父「私を見に来たのではなく、リサを見に来たんだよ。」

「私をですか？ 私を見ても何も面白くはないですが……。」

父「お前は、隠された姫や白銀の乙女や真珠姫　とされているんだよ。」

今まで私達がお前を馬鹿な男どもから守って来たからな。」

何ですか、隠された姫？白銀の乙女？真珠姫？

私は平凡が良いです。地味が良いです。目立ちたくないです。」

父「・・・また、声にでていいよ。」

「では、今回見た皆様はすっかりされたでしょうね。こんなに平凡な顔と思って。」

父「本気で思っているのかい？」

「????そうですが。なにか？」

父「・・・リサよくお聞き。みんな見に来て何で固まっているのだと思う?。」

「私の顔が凡人過ぎて、引いているのかと。」

父「リサ、そうではないよ。お前は、自分が普通で凡人だと思っ
ているかもしれないが

そうではない。お前は美しい。頭もいい。みんなが固まってい
るのは、お前が

可愛く美しいからだ。」

「私が美しいですか？」

父「親だからとかではないよ。これからいろんな事がある。リサ自
分の容姿を少しは理解しなさ

い。」

「自分では、普通だと思うのですが・・・」

父「お前がそう思っているのは、分かっているよ。でも、人から見
たらお前は美しいのだよ。

今日ココに来て、いろんな者がお前の容姿を見て求婚してくるだ
ろつ。いろんな困難が

あると思う。その事について一応覚えておきなさい」

「はい。」

このような会話の後、ココに来た。

「お父様、お父様の言っていたこと、少しは理解しました。」

父「理解してくれてか！」

「はい。こんなに人が集まり固まっていますから。」

父「そうだな！」

「そして思ったのです！」

父「思った？」

「はい。平凡、地味、が一番だと！」

父「そうか……」

父に心の声

お前が地味で平凡が言いと言おうと、無理だと思うぞ。

お前が思っているよりお前は頭がよく、いろんなモノを発明した（作物料理などの事番外でまた書きます）そして、お前は美しく、王家で唯一の姫なのだ。

「早く測定して、屋敷に帰りましょう」「ニッコリ

父「そうだな」「ニッコリ

そう言って王の間に入っていったのであったが……

このリサと父の微笑みを見た者達が、今日一日使い物にならなかったという。

あるものは、

「天使だ・・・」と言いジッと同じところを見つめ

また、あるものは、

「女神だ、親衛隊を作りお守りしなくてわ。」

と動くのであった。

その3日後、城中のメイド、騎士、事務次官達によってリサ親衛隊
が出来るのであった。

その人数は、城に勤めている全てのモノであった。

その後、リサの兄により纏め上げられるのであるが、それはまたの
話で。。。。

15話 王とご対面

そんなこんなで、やっと王の間に来ました。

父「ヨシュアン・フレサンスです。入ります。」

???「オウ。」

カチャ

そこには、父と同じぐらいの美形が座っていました。
この方が王なのかしら？

父「リサを連れて来たぞ。」

王「そうか」

父「リサこいつが、王で俺の従兄弟だ！」

父よ王に対してその態度はどうかと思うぞ・・

リサ「リサ・フレサンスです。よろしく願いいたします。」

王「レオナード・ハーツ・ミルレイドだ。こちらこそよろしくな。」

リサ「はい。ところでお父様・・・王に向って今の態度は何ですか？」

父「いや〜。昔ながらの付き合いのせいと言っか・・・何というか。」

リサ「お・と・う・さ・ま・！・！・！」

父「はい・・・すみません。」

王「はははあ（笑） お前がそんなになっている姿を始めてみたぞ（笑）」

父「仕方がないだろ・・・お前にも娘が居れば、この気持ちが分かるんだ！」

王「残念だったな！ 俺には息子しか居ないからな。」

王「リサよ。私とヨシユアンは、幼馴染であり従兄弟なのだよ。昔からこんな感じだ

許してやってくれ。」

リサ「王がそう言うのでしたら・・・」

父「レオの言う事は聞くのか・・・」

当たり前でしょう!! 長いものには巻かれるです!!
いくら転生したからって、中身は生粋の日本人ですから!

王「ヨシユアンはどうでもいいとして。リサはホントに美しいな」
」

父「そうであろう! 頭もいいぞ!なんて言っただって3歳ですでに、
上級魔法の書物をすべて

読み漁り、政治、農業、薬剤、などすべての本を4歳までに読
みきつて、既に自分のものに
しておったからな!」

王「そうなのか?」

そう言つと王は私を見た。

くそ爺！ 後で憶えているよ！

父「・・・???」ぞわわあ

リサ「お父様が言う通り、確かに読み漁りましたが・・・」

王「それはすごいな～～」。

リサ「しかし、すべて覚えているわけでは 有りませんので。」

実際は、一度読んだものは忘れないけどね
そんなこと教えてやる必要はないもんねえ

王「そうか～～。しかしな～～・・・う～～ん・・・」

父「???」

リサ「???」

何でしょう？ イキナリ悩みだしましたね。
何かろくなこと考えてない気がします・・・

ポン

王「そっか！ そしたらすべてが旨く行くな」

父「どうしたんだ？？ イキナリ悩みだしたりして。」

王「いや〜〜。 良い事思いついてな！」

父「いいこと？」

王「リサを息子の婚約者にしよう！」

父・リサ「
はあ?????????
」
」

16話 今までの登場人物

リサ・フレサンス

五歳

王族で唯一の姫

魔力・無限

普通に生活しているだけで、マナを作り出している特殊な存在。
精霊に好かれる体質

一度読んだ書物は、二度と忘れない特殊な体質も持っている

容姿

白銀の髪 パッチリ二重の目が特徴的

肌は真っ白で極め細やか

美少女

性格

怒ると無表情になり有無を言わさない。

地味平凡を愛し、植物・作物・農業を愛して病まない。

父

ヨシュアン・フレサンス

36歳

王族で王の従兄弟であり幼馴染

今は、第一次軍の団長で一応偉いのだが、娘嫁ラブの痛い存在

母

リリア・フレサンス

32歳

穏やかでオツトリ天然

旦那と息子の奇怪な言動行動を穏やかに見つめている

兄

ユイリス・フレサンス

12歳

妹命のシスコン。

顔は、イケメンでリサとおなじ白銀の髪が特徴

魔法高等学校に入っており成績優秀・文武両道でファンクラブが存在するぐらいモテる。

しかし、頭の中は妹を守る事しか考えておらず。

そのために剣術と魔法学校に入ったぐらい残念な子

王

レオナード・ハーツ・ミルレイド

36歳

父の従兄弟 兼 幼馴染

この国の王であり、リサと自分の息子を結婚させてリサを自分の娘に考えている

皇太子

ヒューバード・ハーツ・ミルレイド

12歳

レオナードの息子で皇太子

ユイリスと幼馴染であり、リサのストーカー??

父親とタックを組んでリサを自分のものにと考えている。

17話 父対王の攻防戦

父「そんなの！！ 許すわけないだろ！！」

おお～～～！ 初めて父が役に立った！
その調子でがんばれ～～～！

王「え～～～～。何で？？」

父「何でって！！・・・」

父よ・・・もう負けか？ 不甲斐ないよ・・・

父「何でもだ！！ リサはズ～～～～ット家に居ればいいんだ
！！

結婚なんかしなくて良い！」

何か・・・理不尽な事言ってるけど。

まあ。結婚なんてせずに家に居てズットと植物達と・・・うふ
ふふう

王「そんなの出来るわけないだろう！」

なっ～～～にい～～～！！！！

父「いやー！　結婚なぞさせない！」

王「そうではなくなてな・・・」

父「何だ！」

王「お前、一応王族だろ・・・少しは分かれよ。」

父に空気を読めとか考えろとかは、無理だろう（；-0-）

王「よく考えてみる。リサは、王族でだった一人の姫だぞ！しかも、この美貌

とこの頭の良さ！他の国がほっとくはずないだろー！」

父「う~~~~~~~~ん~~~~~~~~」

王「他の国に嫁に行つて見ろ！　滅多に会えないぞ！いいのか??」

父「いやだ~~~~~!」

父押されているぞ！　頼むからがんばって！

王「そうだろう！　それならうちの息子に嫁げば何時でも会えるだろ。」

父「う~~~~ん~~~~」

王の心

もう少しで、落とせるぞ！

息子と結婚させ、リサちゃんにパパと呼んでもらえる・・・うふふふ・・・

どう見てもリサちゃんは、あいつの好みのタイプ、ドツ・ストライクだもんな〜。

王「直ぐに決めなくてもいいぞ。レオとリサの気持ちもあるからな。」

父「ユイが何と言うか・・・」

王「レオとお前の所の息子とは幼馴染だ、大丈夫だろ！」

父「いや・・・リサの事になると話しは別だ・・・きっとお前の息子を・・・」

王「そんなになのか？」

父「ああ・・・。」

何だ??この会話。

私抜きで話が進んでるし・・・

私、結婚なんてするつもりはないのに。

まあいいっか。

どうせ、するつもりないから。ドンだけ話し合っても意味ないのに・
・

放置しといて大丈夫だろう。

放置してしまったりサであったが、この1時間後・・・後悔するの
であった。

そしてこの勝負 王の勝ち!!

ヨシユアンは、一生リサにネチネチとこの時の事を言われるのであ
った。

18話 短いです。ごめんなさい

あれから、結構時間がたった。

測定するだけなのに何でこんなに時間がかかるのかというと・・・

父と王の話が終わらないのだ。

その話しも下らない事だらけ！

いい加減飽きた。

「お父様・・・」

父「ん?? どうした?」

「一体何時になれば 測定をするのですか?」

父「あ!・・・」

オイ！！　忘れてたのか？？　忘れてたんだよな！

お・は・な・し　しなきゃだめですか・・・

ぞくっ

父「すっ・・・すまん。けして忘れてたんじゃないぞ！
だからな？　そのおはなしはやめてくれ・・・」

チッ

王「今なら息子が測定場にいるから、みんなで行くか！」

みんなで行くんですか？

何故か、ものすごく嫌な予感がするのは気のせいですね。

これ以上私に嫌なことをさせるつもりなら、一生神様を呪いますよ。

父「そうだな。　お前の息子を好きになるとわ思えないがな。」

王「何を言う！　絶対気に入る！」

父「まあ・・・会ってみればハッキリする。」

王「そうだな・・・」

何か勝手なことを話しているけど 無視です。
そう、無視するのが一番です。

早く測定を終わらせて家に帰るのです。
そして、植物達 精霊達 と・・・うふふう

しかし、この望みは叶わないのであった。
しかも、これから起こる出来事を考えると、これまでの生活がどんなに幸せであったか思い知るのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6858o/>

神の願い

2011年7月24日12時11分発行